

京都御所 新春の展示

(令和5年 干支「卯」)

今回の展示作品

はぎ うさぎ

萩に兎 狩野派 筆 江戸時代初期

桂離宮古書院の御輿寄(内玄関)にある杉戸です。右面には、萩や薄の中で穏やかに座る丸く可愛らしい兎が2羽、左面には、何かに気づき、片方の前脚を上げながら振り向いている兎が1羽画かれています。

江戸時代後期の記録では狩野永徳(1543~1590)の作品として伝わっているものの、絵の様式などから、二条城遠侍の障壁画を画いた狩野甚之丞(?~1626)の作品である可能性が指摘されています。



左面拡大図



右面拡大図



古書院御輿寄 外観



古書院御輿寄 室内



杉戸全体

ぐんじゅう くさき 群獣に草木 岸連山筆 安政5年(1858)

天皇の御書齋として建てられた京都御所^{こうしゆん}迎春の南の間には、北側と西側に計8面の襖絵^{ふすま}があります。画題のとおり、8面全体に様々な種類の動物や四季の草木が^{えが}画かれています。本展示では、令和5年の干支である兔がいる北側4面を展示します。

金泥^{きんてい}を用いた霞の中に、右側から山羊・馬・猫・猿・犬・牛・鹿・狸・兔が配され、動物の間には若松・桜・百合・アザミなどが画かれて、ほのぼのとした雰囲気を感じさせます。

筆者は岸駒^{がんく}(1749~1838)を祖とする岸派^{きは}の三代目に位置した岸連山(1804~1871)で、動物の絵を得意とし、塩川文鱗^{しおかわぶんりん}・中島来章^{なかじまらいしょう}・横山清暉^{よこやませいき}らと共に幕末の「平安四名家」と評されました。



迎春南の間 群獣と草木



兔の様子



迎春外観



迎春南の間